

書評シンポジウムを終えて

——松下道信『宋金元道教内丹思想研究』——

奥野 新太郎

はじめに

宋金元の詩文を研究する評者にとって、今回の書評シンポジウムで取り上げられた松下道信氏の『宋金元道教内丹思想研究』は率直に言って難解なものであった。さらに、本シンポジウムには思想研究を専門とする研究者がパネリストとして選ばれるなか、評者は唯一の門外漢でもある。そこで、今回のシンポジウムにおいては本書の核心である内丹をめぐる諸問題に正面から切り込むよりも、努めて文学研究の立場で本書を読んだときの興味や関心に絞って論点を提出することにした。これは当該分野に対する評者の不勉強が主たる要因であることは言うまでもないが、本書を読み進めるなかで、評者がふだん文学を通して見ている宋金元という時代の様相と、本書で論じられている当時の道教の世界がどのようにつながり得るのかというところに評者の関心が集中してしまったことにもよる。内丹道における性と命をめぐる議論ももちろん興味深いものであるが、これらを「同じ時代に起こっていた議論」としてどのように見ている

けばよいのか、そこには文学研究と対話可能な論点や問題は存在しないのか、という点に、評者の関心は終始してしまったのである。書評としてはあまりに偏りすぎた関心の持ちようではあるが、シンポジウムの討論の一部として割り切ることとした。

当日のシンポジウムでは、事前に数回の打ち合わせを行い、そこで各評者から寄せられた発言稿を検討し、それをもとに当日の討論稿（当日資料として配付）を作成した。本稿ではまず当日の討論稿に取り上げられたものについて述べたあと、時間や論点調整の都合上取り上げられなかったものについても付記する。

一、白玉蟾の出版活動について

本書の第Ⅰ部第一章に白玉蟾の出版活動に関する論考が収められている。南宋という出版文化の隆盛した時代において、朱子学のみならず、道教もまた出版を積極的に利用したことについては、さもありなんというところではあるが、そこに「天譴」という道教ならではの解決すべき問題が存在していたという点は興味深いもの

であった。

『悟真篇』の後序によれば、張伯端のもとへ教えを請いに集まる者たちに『悟真篇』を解釈して授けたところ、彼らは伝授に値しない者たちであったため、張は災いにあう羽目に陥った。そして三度目にして張伯端はそれを「天譴」であることを理解したという（本書一五三頁。以下松下著からの引用には頁数のみを付す）。このような考え方は、『悟真篇』の注釈の作成や伝授のほか、「ひいては書物の流通や出版に影響していた」とされ、後に「天譴を懼れず書物を出版するのはなぜか、という議論」の出現へとつながる（一六二頁）。

白玉蟾はこの問題に対して、「師伝や口訣を出版することは天譴ではなく天授だとして、百八十度その方向を変えた」（一六四頁）とあり、「天賜」という語の読み替えを行う。『悟真篇』は詩詞のかたちで書かれた丹訣であり、口訣による解釈が無ければ理解できない。それゆえ、張伯端は「解釈されていない丹訣を見て自分で理解する分には構わない」として、『悟真篇』を手にするを「天賜」と呼んでいた」という。だが白玉蟾は「平易な文章で心伝・口授を刊行すること」を「天賜」と呼び、その意味を読み替えることで、出版行為を正当化することに成功する。

このように本書では白玉蟾の出版活動について、そこに存在した道教特有の「天譴」という思想的な問題と、白玉蟾がそれをいかにして思想的に解決したかが明らかにされている。また、本章の最後に著者は次のように述べる。

南宋の、出版という知の伝達手段の変革時代に当たり、白は出版を意識的に利用した。そういう意味で、正に白は「時代の

申し子」であった。しかし、彼が出版を利用するためには、張伯端以来の「三伝非人」といった師授意識を克服する必要がある。（一七〇頁）

本章はまさにここに述べられる師授意識の克服を明らかにしたものであるが、評者にはむしろ前者の視点の方が興味深く感じられる。周知の如く、書物を出版する際に、序跋においてその書の出版経緯や出版価値を述べることは通常のことであった。場合によっては方便や宣伝めいたものも含まれることもある。本章で述べられる「天譴」をめぐる議論にも、果たしてそのような側面は無かったのだろうか。白玉蟾が行っていることは、その行為だけを見ると、著者も「時代の申し子」と指摘するように、出版隆盛の時代に時勢に乗って出版活動を行うという、当時の文学など他の領域と同じことを道教も行って、ということになる。すると、本章で取り上げる議論は、当時の外的要因に多く刺激され、それに合流すべく生じた議論なのか、それとも道教の内在的な展開の帰結として生じたものなのか。無論、これは両者が相俟って生じたものであり、截然と切り分けることは不可能であろうが、だからこそ、外的要因に起因したものとしてみえた白玉蟾の出版活動についても、著者の考えを伺いたいと思った。

シンポジウムにおいて著者からは、外的要因に起因するものとしての側面ももちろんあるとの回答を頂けたが、評者がこのことに関心を惹かれるのは、白玉蟾の出版活動を道教内部の出来事としてではなく、この時代に生じた、他の様々な事象と有機的に関連する一つの事象として、総論的な視点から捉えてみたいからである。そうすることで、本章で述べられる問題は、評者の専門とする文学領域

と論点の共有が可能となる。著者が「我々がいわば当たり前のものとして接する書物の背後に潜む、当時の規則や禁忌といった様々な意識」（二七〇頁）と指摘するように、同じ出版活動と言っても、それが行われた環境や集団によって様々な事情が存在する。一方、それは言い換えると、出版という共通の技術によって、当時の様々な分野や領域において一定の変化が生じたという、ゆるやかに繋がりがあつた大きな事象として捉えることもできる。道教の出版活動における口訣や天譚などの問題は、他の領域において出版というものを考える上でも示唆に富むものであつた。

二、言葉をめぐる問題

道教の出版活動において「口訣」というキーワードがあつた。そしてそれに関連して、『悟真篇』などの文献が詩詞のかたちで著されているという問題がある。詩詞などの韻文は散文に比べると曖昧さを避けられず、それは教説の伝達においては一つの問題と言わざるを得ない。このことについて本書はしばしば言及する。

『悟真篇』の前半は、……およそ論理的な説明と本質的に相いれない詩詞という形式をとりながらも、内丹の世界を体系的に表していると思わせるような、極めて興味をそそられる構成を採っている。（五六頁）

もちろん、こうした注釈が数多く著された原因の一つは、『悟真篇』が詩詞の形式をとり、多様な解釈の余地を残していたからである。（六六頁）

『悟真篇』は、内丹について余すところなく述べている。ただ

し、それは象徴的な詩詞の形であり、それゆえ、口訣を知らない一般の人には理解できない。しかし、仙骨がある人ならばおのずと理解でき、私が個別に伝授する必要はない。張伯端はこう述べ、これを「天賜」と呼んでいる。（二五五頁）

注釈を付けることは象徴的な詩詞を平易な言葉に直すことであり、天機を洩らすことになるからである。（二六〇頁）

全真教文献を取り扱うには一つの困難が常に付きまとう。王重陽や七真には大量の資料が残るが、その大部分は詩詞の形式をとるのである。それは道という語れないものを語ろうという彼らの言語的な戦略の一つであつたと見ることができるともいれない。いずれにせよ詩詞は論理的な伝達手段でないこともあつて、全真教の教説についての分析は、……その膨大な詩文集については余り用いられることがなかつた。（二〇四～二〇五頁）

詩詞という形式は読み手に「多様な解釈」を許すものであり、一義的な解釈が望まれる教説の伝達においては「困難」と言わざるを得ない。そこで口訣による解釈が必須とされるわけであるが、このように教説が詩詞の形式で示されるということは、そこに詩詞の解釈をめぐる文学解釈的な問題や議論なども存在したのではないだろうか。

一般に宋代の詩は唐詩と比較して理に勝ちすぎる嫌いがあると言われている。唐詩が主情の傾向にあるのに対し、宋詩は主理の傾向にある。そして元朝になると、元人は自分たちの詩を「唐詩の主情への回帰」として位置付ける。ここには論理と抒情との対比構造が示される。

また、宋代になると注釈の学が発達し、文学においても多くの注釈が作られる。それに伴い、注釈による弊害なども議論されるようになる。注釈はある種の実証主義であり、注釈の盛行は、作品の解釈や鑑賞に実証主義という方法論が強く作用することを意味する。

しかし、過ぎた実証主義は作品の理解を却って損ねるものとして、批判も生じる。その結果、作品の正しい理解を求めるといふ尚意の読みに対し、正しい解釈よりもその作品の文学的な味わいを重視する尚味の読みが生ずるなど、読みの理論が展開してゆく。言葉を理解可能なものと見るか、それともそこに限界を認め、言い尽くせないものを味わうという態度をとるか。解釈学的な論点が多様に展開するわけであるが、そこには言葉というものをどのように捉えるかという根本的な問題が存在する。『易』の「言は意を尽くさず」を持ち出すまでもなく、言葉の不確実性に関する議論は中国において古くから行われている。文学作品とは言語によって構成されたものである以上、そこには言葉というものの絶えざる葛藤がある。

道教の修養においては、言語テキストは究極的には言筈に過ぎず、テキストそのものを研究の対象とする文学研究とは、その位置付けは異なるものかもしれない。だが、詩詞という読み手による解釈に多く依存する形式で書かれた丹訣と、それを読み解くという営み自体は、文学を読む行為と同様のものと言えよう。そこには両者に共通する問題を見出すことはできないだろうか。

また、本書第三篇第二章では、儒仏道における「立談」と「心授」という考え方について触れられる。言葉で語り得る「立談」と言葉で語り得ない「心授」という対比にも、たとえば文学の解釈における尚意と尚味のような議論との何らかの類似性が見出せるので

はないか。先に触れた出版活動をめぐる議論の中でも、文字テキストである丹訣はそれだけでは理解できず、口訣による解釈が必要であるというものがあつたが、そこにも（文字テキストで）語り得るものと語り得ないものという、言葉をめぐる問題が潜在しているように思われる。道教、とりわけ内丹という実践的な修養の場において、言葉というものを果たしてどのように捉えていたのか。また、さらにそこに出版による文字テキストの複製と伝播というこの時代特有の要素を絡めたとき、どのようなものが発見できるのか。大いに関心を惹かれるところである。

三、道教内での位置付けと、 文学にあらわれる道教イメージ

本書では内丹における性と命をめぐる精緻な議論が展開される。この分野に不案内な評者にとつて、道教の教説について繰り広げられる本書の様々な議論は大いに興味深いものであり、勉強になった。だが、ここに展開されている内丹の根幹に関わる議論と、評者がふだん詩文などを通じて触れている、或いは垣間見ている道教的な言説やイメージとの間がどのように接続するのかということについて、見出せないままとなつてしまった。蓋し、本書に述べられている議論が道教、内丹の深奥であるとすれば、詩文などに描かれる道教的な言説やイメージは、その表層であると言えようか。そのように考えたとき、本書で論じられた議論が、当時の道教全体のなかでどのような位置付けにあり、また当時の人々の道教理解や実践にどの程度まで浸透し、或いは影響を与えていたのかについて、著者の考え

を伺いたいと思った。内丹の議論とはかなりずれた質問となつてしまつたが、当日のシンポジウムでは、著者からは雑劇などに登場する道士の描かれ方などに着目するとよいのでは、という回答を得ることができた。

確かに宋代以降は戯曲や小説などの通俗文学が隆盛し、そこには様々な性質の人間たちを「登場人物」として詳細に観察することができる。そもそも文学作品は当時の人々の生活や風俗などを知り得る資料としてよく用いられており、戯曲や小説は詩文よりも情報量に勝るため、重宝される。そこに登場する道士などの道教に連なる登場人物の造型や言動を、本書に論じられるような当時の道教内における議論や展開などを踏まえて詳細に観察することは意義のあることであろう。これは文学研究における重要な課題である。

だが一方で、信仰や養生の実践など、道教が有する人々の生活と密着した側面についてもやはり注意したいのである。文学作品に表れる道教的な言説やイメージと、当時の道教の根幹に関する議論は、同心円上に接点を求め得るのかどうか、今後この時代の作品を読む上での課題の一つとしたい。

四、宋金元という時代

これはシンポジウム当日の討論稿には載らなかつたが、事前の打ち合わせにて評者が提出したものである。本書第Ⅰ部序章は全真教の研究史について総括し、全真教を「新道教」として位置付けるといふ道教研究における支配的な見方が、近代的な言説の中で築かれたものであると指摘し、それに対する脱構築の必要性を説く。そこ

にはたとえば初期の研究において全真教の祖である王重陽に「北宋遺民」という性質を見出して強調されたことや、日中戦争の影響など、この時代の文学研究にも共通する現象が見られる。宋金元時代の研究において、「遺民」や「異民族」などのキーワードはよく用いられる。だが村上哲見「武臣と遺民」（同氏『中国文人論』所収、汲古書院、一九九四年）などにも説かれるように、いわゆる「遺民」というかたちで当時の人々の言説や行為を評価することには危険が伴う。そこには後世のイデオロギーや、観察者の生きた時代背景などが反映されてしまうことがあるからだ。道教史研究にもかかる問題が少なからず存在し、それが「新道教」としての全真教など当時の道教の評価に影響を与えていたという点は、文学研究とも共通する問題意識として興味深く読んだ。

金と南宋という南北が分断された状況のなか、文学においては金の文学と南宋の文学とそれぞれ別領域で研究が進められる一方で、使者の往還や書物の伝播など、南北の交流という点についても注意されている。蘇軾や黄庭堅など北宋文学の受容や、江西詩派に関する議論など、金と南宋は同じ祖から分岐した文化圏として、そこには共通する論点や問題も少なくない。翻つて、本書では全真教と内丹道の間にはあまり交渉が無かつたことが述べられるが、道教全体を見たとき、金朝治下の道教と南宋の道教は、やはり基本的に没交渉であつたと考えてよいのだろうか。

さらに、元代になると元人は自分たちの王朝が未曾有の版図を実現したものととして、いわゆる「天下混一」「南北混一」に盛んに言及する。統一を望ましいものとして希求する向きは当時の人々にまま見られる。北の全真教と南の内丹道がやがて一つの全真教として融

合するという道教史の展開は、かかる時代の「空気」のようなものに呼応するところもいくらか存在したのだろうか。

本書で論じられた内丹をめぐる詳細な議論や問題を、宋金元時代史という大局的な観点から著者がどのように捉えているのか。評者にとって極めて興味深いところである。

おわりに

宋金元という同じ時代に関心を寄せる者として、道教を通じて見えてくる宋金元という時代の姿とはどのようなものなのか、そしてそれは、歴史学や文学などを通して見えているそれとあわせたときにどのような時代の像を結び得るのか。これは討論稿の末尾に付され、当日は時間の関係で触れることのできなかつたものだが、つまるところ、本書を読んで得た評者の関心のすべてはここにあると言ってもよい。北宋から金と南宋へと分断され、また元というかたちで混一を果たす。かかる環境のなか、文学においては北宋の文学を承けつつ、金朝と南宋とでそれぞれの展開を見せ、それが元朝の文学として融合してゆく。北宋の張伯端からはじまり、主として南宋で展開した内丹道と、金朝治下に発展した全真教、そしてそれらはやがて融合してゆく。分断と統一という特有の外的要因の中で行われた様々な営みが重なりあい、結び得る像について、今後も追求していきたい。

《注》

(一) 尚味と尚意については周裕鍇「尚意」から「尚味」へ―宋代詩歌解

『積学の重心の変遷に関する試論―』（山本範子訳、『中国学志』随号、二〇〇二年）なども参照。